

第2章 鶴ヶ岡遺跡第6地点の調査

I 遺跡の立地と環境

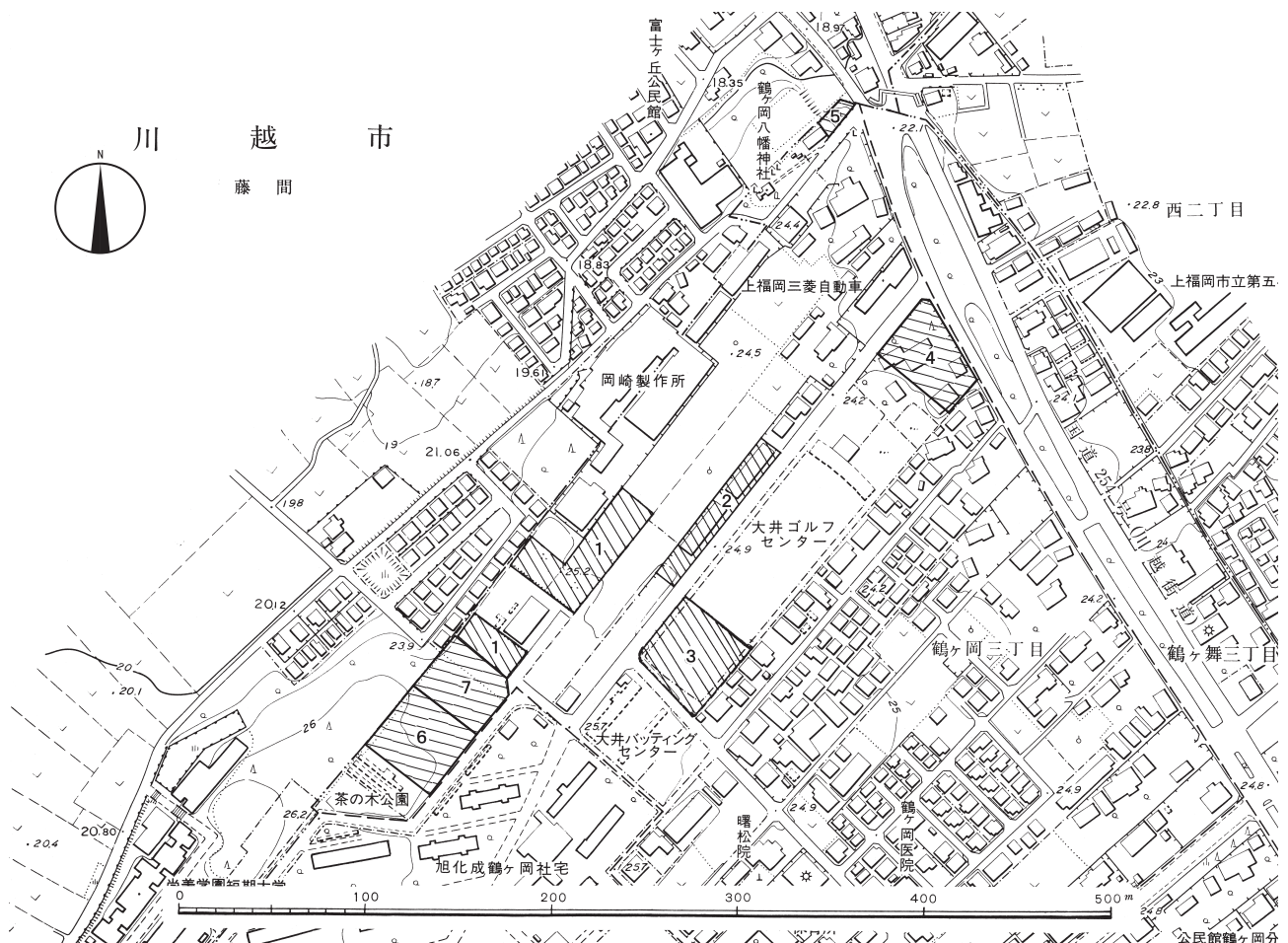
鶴ヶ岡遺跡は、入間川の支流新河岸川に注ぐ藤間江川に面した標高22mの台地北縁に立地する東西200m以上の広い遺跡であり、その範囲は、川越市とふじみ野市にまたがっている。表面採集の遺物として、縄文早期のほか中期の各時期、平安時代の土器が知られており、複合遺跡である事を示している。表面採集の遺物は北の崖面寄りが密であり、住居などの集中部分と思われる。この部分のうち、ふじみ野市鶴ヶ岡八幡神社に接する川越市域部分で、1988年に調査が行われたが、その際に勝坂期末の住居1軒・加曽利EⅠ新期の住居1軒・加曽利EⅣ期の土坑などが検出され、ほぼ完形の有孔罎付土器を含む大量の土器と石器若干が出土している。また、本遺跡の下流にある西遺跡の一部が1992年以降の試掘・発掘調査で、阿玉台Ⅰb期、勝坂期Ⅱ～Ⅲ期、加曽利EⅢ期の住居など24軒が、確認または検出されている。

ふじみ野市、川越市にまたがる本遺跡のうち、ふじみ野市分は1991年に旧大井町の体験学習園開設のため初めて試掘調査を実施し、2016年3月現在、7地点で試掘調査、本調査を行っている。2015年7月の第6地点の調査で、本遺跡で初めて旧石器時代と縄文時代早期の炉穴群が検出された。2001年7月に埼玉県教育委員会が本遺跡の南西側を試掘調査しているが、遺構・遺物は確認されていない。

Ⅱ 本調査に至る経過と調査の概要

調査は保育園建設に伴うもので、原因者より2015年3月17日付けで、「埋蔵文化財事前協議書」がふじみ野市教育委員会に提出された。申請地は崖面上で、遺跡範囲の南西端に位置する。申請者と協議の結果、遺構の存在を確認するため、2015年5月15日～27日に試掘調査を実施した。

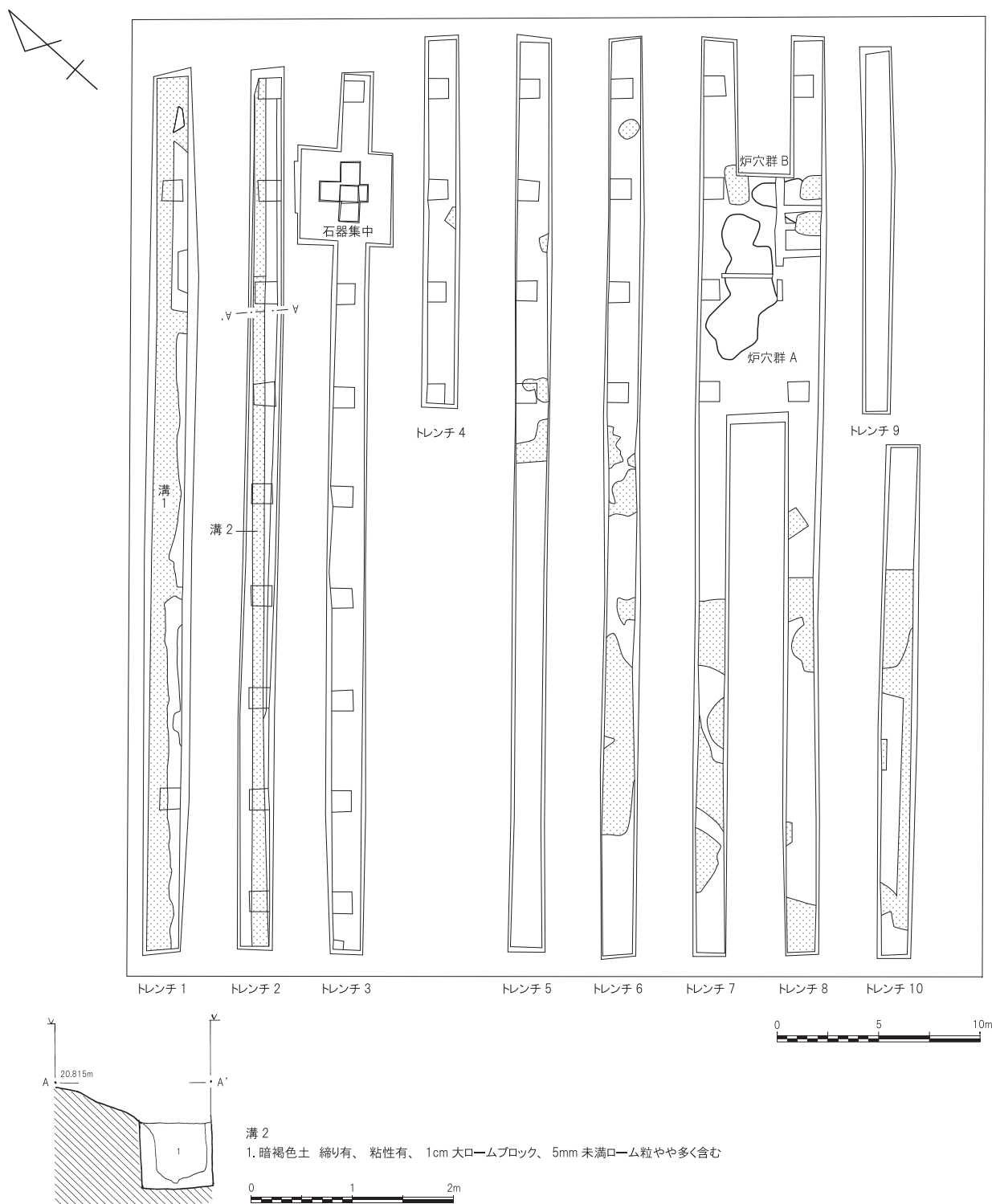
試掘調査は幅約1.5mのトレンチ10本を設定し、



第3図 鶴ヶ岡遺跡の地形と調査区 (1/4,000)

第2表 鶴ヶ岡遺跡調査一覧表

地点	所在地	調査期間 ()は試掘調査	面積 (㎡)	調査原因	確認された遺構と遺物	所収報告書
1	鶴ヶ岡 3-3-1・21	(1991.6.26～7.17)	5,710	体験学習園整備	遺構なし、縄文土器片、銭	町内遺跡群 I
2	鶴ヶ岡 3-16-1・14	(2000.4.6～2000.5.16)	1,327	共同住宅	遺構なし、旧石器、縄文土器片	町内遺跡群 X
3	鶴ヶ岡 3	(2005.1.7)	2,059	個人住宅	遺構・遺物なし	町内遺跡群 X II
4	鶴ヶ岡 3-18-1・12、23-3、26-6	(2005.5.12)	1,742	店舗	土坑、縄文土器片	市内遺跡群 2
5	鶴ヶ岡 3-1-1	(2013.6.25)	235.5	神社社務所	遺構なし、縄文土器片	市内遺跡群 18
6	鶴ヶ岡 3-18-23	(2015.5.15～27)2015.7.10～8.19	1,983.34	保育園	旧石器時代石器集中 1、縄文時代炉穴群 2	市内遺跡群 19
7	鶴ヶ岡 3-3-20・21	(2015.12.22～2016.1.29)	1,731.79	高齢者介護施設	土坑 1、根切り溝他 2、風倒木 1	未報告



第4図 鶴ヶ岡遺跡第6地点遺構配置図 (1/300)、溝 (1/60)

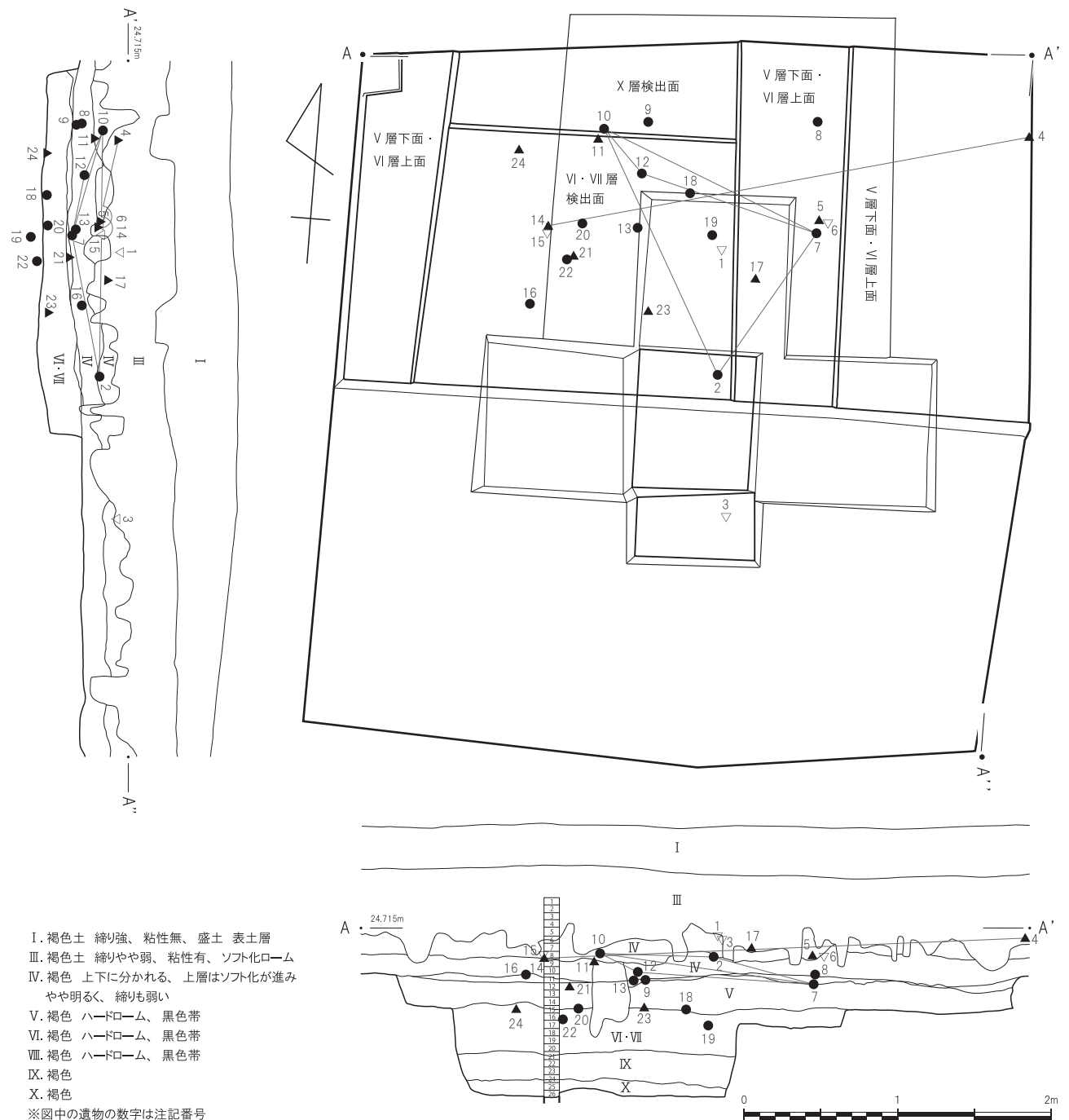
重機による表土除去後人力による調査を行った。人力による調査は地山ローム層で遺構確認を行い、トレンチ6・7で縄文時代の炉穴群を確認した。現地表面から地山ローム層（炉穴群）までの深さは約20cmであった。その後、旧石器時代の遺構と遺物を確認するため、トレンチ1～8内に1×1mの小トレンチを4m間隔に設定した。トレンチ3の小トレンチで旧石器時代の遺物が出土した。現地表面から旧石器時代の遺物出土層までは約70cmの深さであった。

炉穴群の確認調査と旧石器時代の確認調査を行い、遺構の写真撮影・全測図作成等記録保存を行った。

原因者と再協議の結果、炉穴群については建物等による影響がないため保存措置とした。旧石器時代の遺構と遺物については、建物による影響が避けられないため、原因者負担による本調査を行った。

本調査は、7月10日～8月19日まで行った。表土の除去には重機を用いたが、埋め戻しは人力で行った。遺物の実測には、調査区内に3×4mの長方形区画を設定、各杭にA～Dの名称を付した。

整理事業については有限会社アルケーリサーチに業務委託を行った。



第5図 鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器遺物出土状況 (1/40)

Ⅲ 遺構と遺物

(1) 旧石器時代の遺構と遺物

①石器集中遺物出土状況

【平面分布】

平面分布は長軸 2m、短軸 1.7m の楕円形の範囲に 22 点が散漫に分布し、ここから少し離れて (0.9m、1.3m) それぞれ 1 点ずつが出土している。Ob1 と Ob2 は出土点数が少なく全体が散漫な分布を示していることもあり分布の特徴を見いだすことはできなかった。接合資料 2 個体は、注記番号 2+7+10+12 は散漫な分布の範囲内で 4 点が接合し、接合間距離は最大 1.7m、最小 0.4m である。注記番号 4+14 は 1 点が分布範囲外から出土しており、2 点の接合間距離は 3.2m である。

【垂直分布】

垂直分布は立川ロームⅣ層、Ⅴ層を中心としてⅢ層～Ⅵ・Ⅶ層上部にかけて分布していることが看取される。上下のレベル差は最大 57.8cm をはかるが、Ob1 と Ob2 の分布に違いは認められない点から両母岩とも同一の文化層として捉えられる。接合資料 2 個体は、注記番号 2+7+10+12 がⅣ層上部、Ⅳ層下部、Ⅴ層上部間の接合、注記番号 4+14 はⅢ層とⅣ層上部間の接合である。

②母岩別分類

鶴ヶ岡遺跡第6地点から出土した石器石材はすべて黒曜石であり、以下のように母岩別分類を行った。

Ob1: 茶色がかった黒色～灰黒色。淡灰色の不整縞状構造。透明度あり。球顆 (φ <0.5 mm) を含む。平滑な節理面が認められる。13 点 (6.94g)。

Ob2: 茶色がかった黒色～灰黒色。淡灰色の不整縞状構造。透明度あり。球顆 (φ <1 mm) を含み、一部は層状をなす。粗い節理面が認められる。8 点 (29.65g)。

両者は色調や構造がよく似ている。球顆と節理面の違いにより区別したが、同母岩の部位による違いである可能性も否定できない。4 点は小片のため分類しなかった。

③出土石器 (第6図1～9)

出土石器はすべて黒曜石製の剥片である。

1 は右側縁を欠損しており右側縁にガジリが認められる。末端は階段状剥離と判断したが、折れ面の可能性もある。背面は主要剥離面の剥離方向に対して 90°、180° の剥離面で構成される。打面は節理面。打面と背面との縁辺には、両面上に剥離が連続し、縁辺は部分的に潰れている。主要剥離面の打点は明瞭で、打瘤の発達は弱い。打点径 0.7 mm、剥離角 136°、

第3表 鶴ヶ岡遺跡第6地点出土石器観察表 (cm、g)

掲載番号	注記番号	石材	母岩	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考・注記番号
1	16	黒曜石	ob1	剥片	12.9	(14.6)	4.2	0.87	
2	7	黒曜石	ob1	剥片	(22.1)	(14.1)	5.5	0.95	注記 No.10 と接合する。
3	2+10+12	黒曜石	ob1	剥片	22.6	27.8	9.2	2.76	接合資料。
4	2+10+12+7	黒曜石	ob1	剥片	22.8	27.8	9.5	3.71	接合資料。
	2	黒曜石	ob1	剥片	(22.0)	(12.7)	6.3	1.94	注記 No.10 と接合する。
	10	黒曜石	ob1	剥片	18.5	(11.4)	4.6	0.71	注記 No.7、2、12 と接合する
	12	黒曜石	ob1	剥片	(12.8)	(6.5)	1.6	0.1	注記 No.10 と接合する。
5	23	黒曜石	ob2	剥片	20	18.8	11.1	2.93	2点接合状態で計測した。実測図は1点のみ。
6	5	黒曜石	ob2	剥片	24.2	(14.3)	7.8	2.15	
7	17	黒曜石	ob1	剥片	(22.7)	(21.5)	10.3	3.02	下端にガジリが認められる。
8・9	4+14	黒曜石	ob2	剥片	46.3	50.6	15.5	20.14	接合資料。
8	4	黒曜石	ob2	剥片	(22.0)	(27.4)	10.9	5.98	注記 No.14 と接合する。
9	14	黒曜石	ob2	剥片	(25.2)	(50.1)	15.5	14.16	注記 No.4 と接合する。
	3	黒曜石	—	剥片	(4.2)	(5.8)	(0.8)	0.03	
	6	黒曜石	—	碎片	—	—	—	0.05	小片 4 点、重量は合計
	8	黒曜石	ob1	剥片	(21.3)	9.0	7.8	0.53	
	9	黒曜石	ob1	剥片	10.1	(17.1)	(7.3)	0.71	打面上にガジリが認められる。
	11	黒曜石	ob2	碎片	14.8	7.5	6.9	0.57	
	13	黒曜石	ob1	剥片	(5.1)	10.0	2.1	0.06	
	15	黒曜石	—	碎片	7.4	6.4	(7.5)	0.14	一面はガジリ。
	18	黒曜石	ob1	剥片	(7.0)	(14.3)	2.8	0.25	下端縁辺にガジリが認められる。
	19	黒曜石	ob1	碎片	16.9	7.3	5.8	0.2	
	20	黒曜石	ob1	剥片	(11.3)	(11.2)	5	0.32	
	21	黒曜石	ob2	剥片	(13.3)	6.8	3.8	0.25	
	22	黒曜石	ob1	剥片	(10.2)	16.8	(2.9)	0.3	
	24	黒曜石	ob2	碎片	4.9	10.6	10.0	0.59	

() は欠損を示した。— は小片のため分類不能

打面角 62°。

2 は打面からの折れにより左半を欠損している。右側縁上端にガジリが認められる。末端に球顆からの折れが認められる。背面は主要剥離面と同方向の剥離面で構成される。打面は節理面。主要剥離面の打点は欠損している。打面下にはリップが発達し、打瘤の発達も認められる。3 と接合する。

3 は 3 点が折れ面で接合している。接合面は打面からと背面側の球顆からの折れ。左側縁 1/3 程度と末端の一部を欠損している。背面は主要剥離面の剥離方向に対して 90° の剥離面と打面からの剥離で構成される。打面は節理面で、端部にわずかに微細剥離と欠損が認められる。主要剥離面の打点は明瞭で打瘤も発達している。3 点のうち、注記番号 2 のみ表面の黒曜石本来の光沢が失われおり、他 2 点と色調が異なる。被熱の可能性がある。打点径 0.7 mm、剥離角 138°、打面角 82°。

4 は、2 と 3 の接合資料。

5 は末端を節理面からの折れで欠損している。本剥片の末端部が残置する 7 mm 大の小片が接合するが図示していない。背面は、主要剥離面と同方向および 270° の剥離面で構成されている。打面は節理面。主要剥離面の打点は不明瞭で、打瘤は発達しない。打点径 0.7 mm、剥離角 82°、打面角 74°。

6 は背面からの折れによって左半 1/3 を欠損している。末端の一部にガジリが認められる。背面は、主要剥離面と同方向の剥離面で構成される。末端辺はヒンジフラクチャーを呈する。打面は節理面。主要剥離面の打点は碎けて残置していない。打瘤は発達している。打面角 76°。

7 は右側約 1/2 を背面からの折れにより欠損しており、他にも球顆からの折れが認められる。下端にはガジリが認められる。背面と主要剥離面の下部に下方からの剥離面から両極剥片の可能性があるが、欠損部分が大きく判然としない。背面は主要剥離面と同方向および 180° の剥離面で構成される。打面は単剥離打面だが 1/2 程度しか残置していない。主要剥離面の打点は残置していないが、リングの強い収斂が認められる。

8 は 9 と接合する。

9 は 8 と接合する。

8 と 9 は底面があり下端が幅広になる横長の剥片。2 点が接合している。接合面は左半分が球顆を含む節

理面。右側縁の上部と左側縁を欠損している。右側縁と底面の一部にガジリが認められる。背面は主要剥離面に対して 180° の剥離面とわずかな打面からの剥離で構成される。右側縁側の底面からの剥離面は打点が残置している。底面は球顆を含む節理面で、右半には背面からの剥離が認められる。打面は単剥離打面だが、左側縁側 1/3 程度を欠損している。主要剥離面の打点は明瞭でコーンが認められる。打瘤は発達している。打点径 0.6 mm、剥離角 136°、打面角 124°。主要剥離面左側縁下部にわずかに剥離が認められる。上半部の注記番号 4 は、下部同 14 にくらべ黒曜石本来の光沢が失われており色調が異なる。被熱の可能性がある。

※注 背面構成の表現では、主要剥離面の剥離方向に対して反方向を 180°、左側縁→右側縁方向 90° を、右側縁→左側縁方向を 270° とした。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

① 炉穴群

縄文時代早期の炉穴群の広がりをも 2 ケ所で確認した。調査区の東部、トレンチ 7・8 に位置する。

2 ケ所のうち南側を炉穴群 A、北側を炉穴群 B とした。各炉穴群にサブトレンチを設定し掘り下げた結果、西側の炉穴群 A で 2 ケ所、東側の炉穴群 B で 7 ケ所の焼土面を確認した。

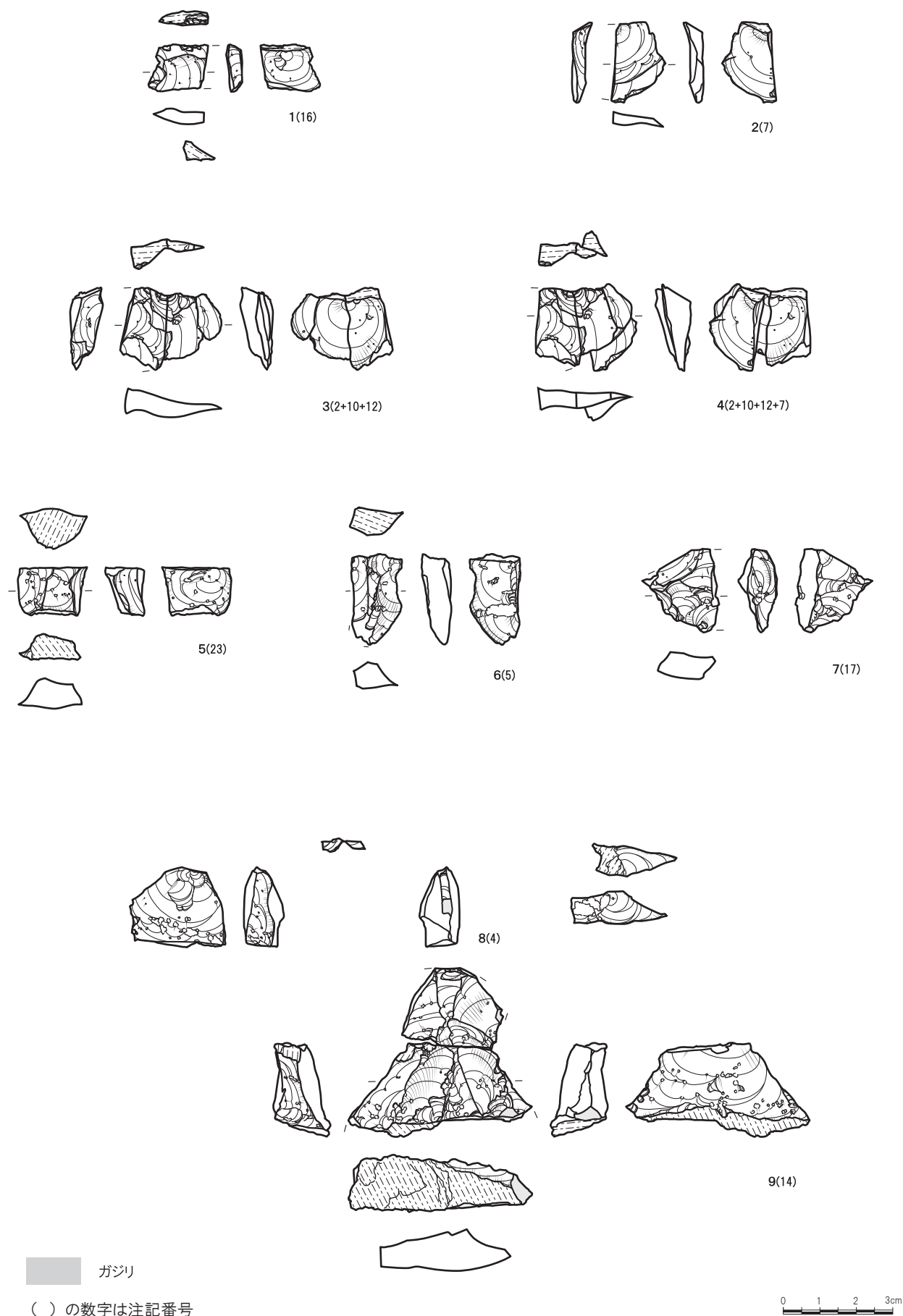
炉穴群 A の平面形態は不整形で、規模は東西 710 cm×南北 238 cm、深さ 40 cm である。炉穴群 B の平面形態は不明で、規模は東西 220 cm×南北 (344) cm、深さ 40 cm である。

各焼土面の規模は第 4 表を参照。

② 出土遺物 (第 7 図 1～5)

1 は炉穴群出土の縄文時代早期の土器で、胎土に繊維を含む。口縁部で、外面には条痕文を施す。

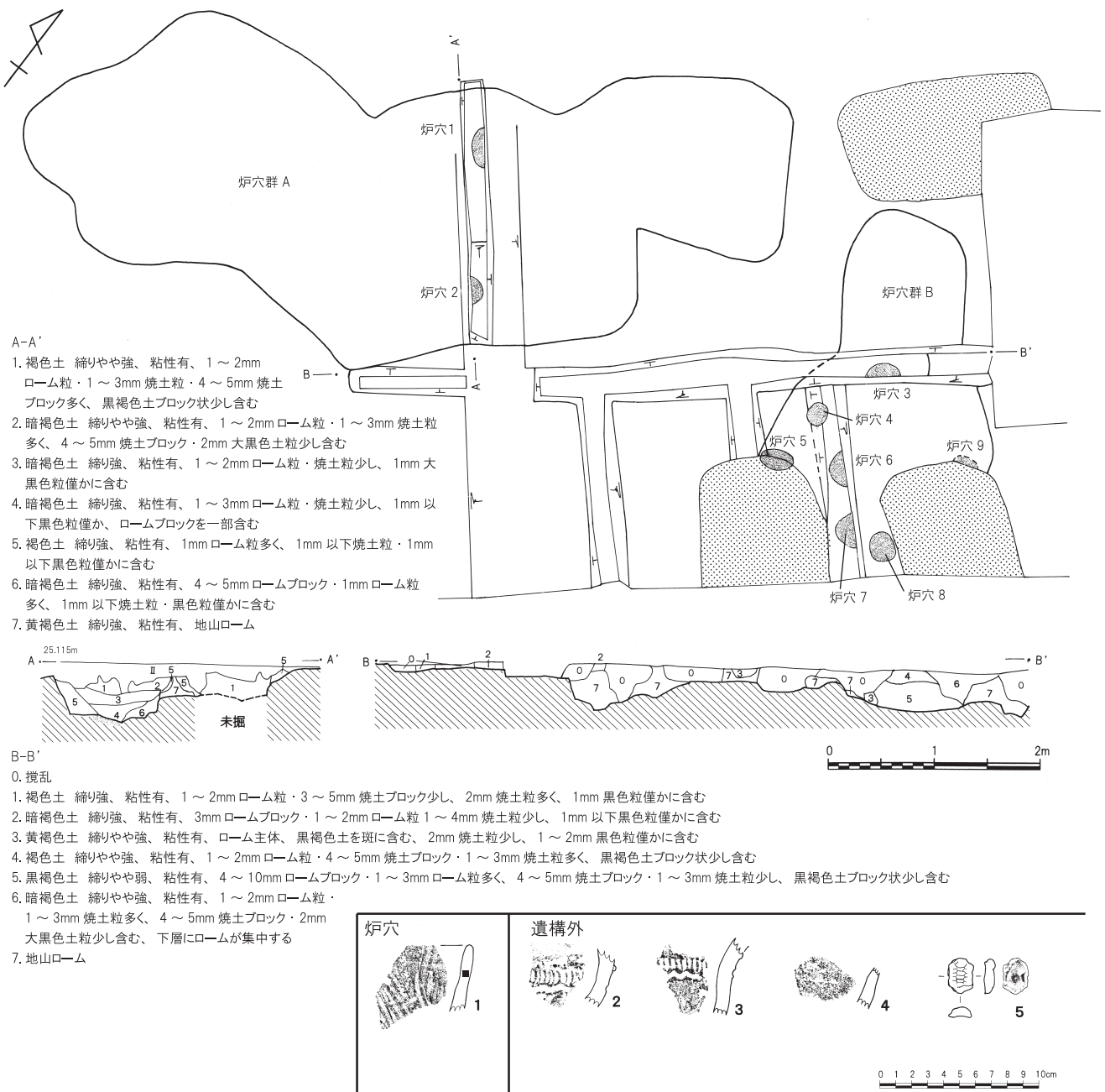
2～5 は遺構外出土遺物である。2 は隆帯脇に角押文を施し、さらに内側に波状沈線文を巡らす。3 も角押文を施し脇に波状沈線文を巡らす。2、3 は縄文時代中期勝坂Ⅱ式 (藤内式) である。4 は無文の縄文土器で、時期は中期か。5 は土製品のドロメンチである。形抜成形でモチーフは亀、色調は橙色、裏面に指頭痕有、重さ 2.12 g である。



第6図 鶴ヶ岡遺跡第6地点石器集中出土遺物 (2/3)

第4表 鶴ヶ岡遺跡第6地点炉穴一覧表（単位 cm）

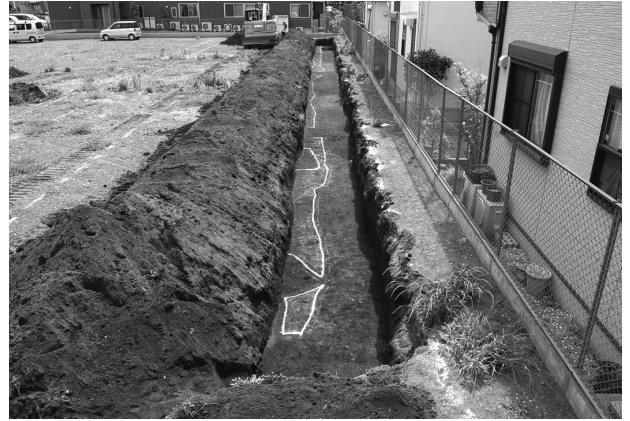
炉穴群	No.	平面形態	確認面径	底径	深さ
炉穴群 A	1	不明	(37 × 11)	—	25
	2	不明	(27 × 11)	—	48.9
炉穴群 B	3	不明	(33 × 12)	—	44.8
	4	楕円形	22 × 18	—	20.2
	5	楕円形	32 × 19	—	10.6
	6	不明	(34 × 15)	—	9.8
	7	不明	(34 × 18)	—	11.1
	8	楕円形	27 × 23	—	0.4
	9	不明	(25 × 17)	—	—



第7図 鶴ヶ岡遺跡第6地点炉穴群（1/60）、出土遺物（1/4）



鶴ヶ岡遺跡第6地点試掘調査風景



鶴ヶ岡遺跡第6地点トレンチ1



鶴ヶ岡遺跡第6地点トレンチ2



鶴ヶ岡遺跡第6地点トレンチ3



鶴ヶ岡遺跡第6地点試掘調査風景



鶴ヶ岡遺跡第6地点炉穴群



鶴ヶ岡遺跡第6地点炉穴群



鶴ヶ岡遺跡第6地点試掘調査旧石器出土状況



鶴ヶ岡遺跡第6地点本調査風景



鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



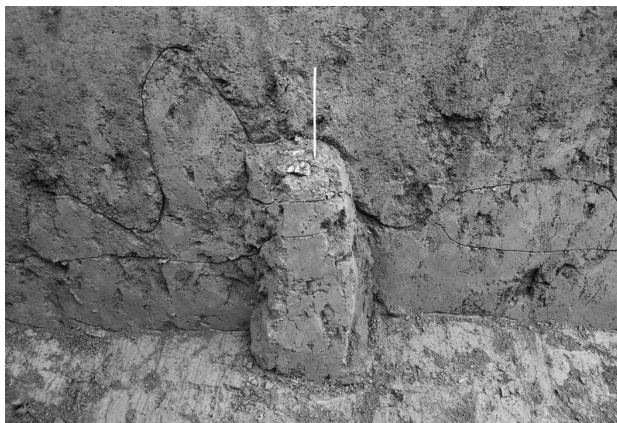
鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



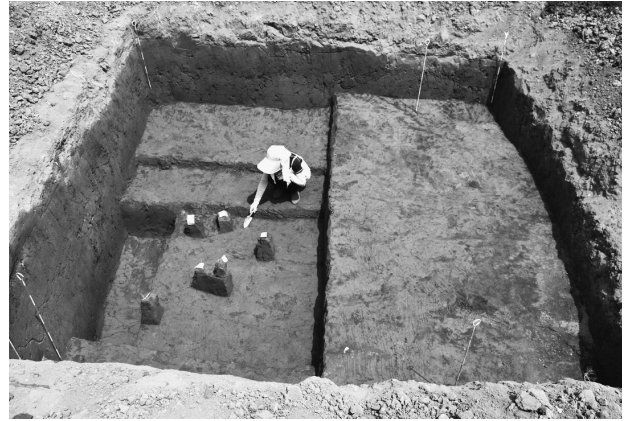
鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



鶴ヶ岡遺跡第6地点旧石器出土状況



鶴ヶ岡遺跡第6地点本調査風景



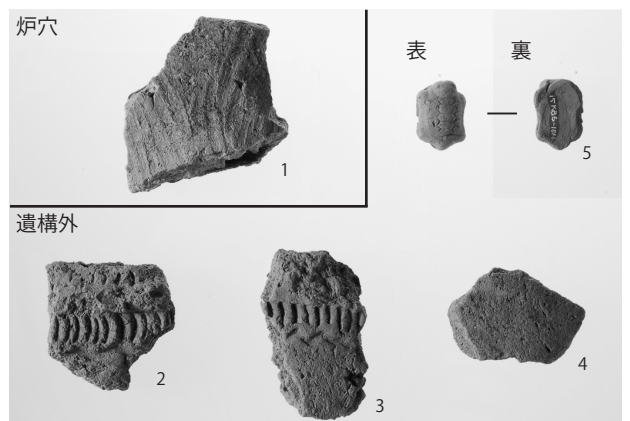
鶴ヶ岡遺跡第6地点本調査風景



鶴ヶ岡遺跡第6地点本調査風景



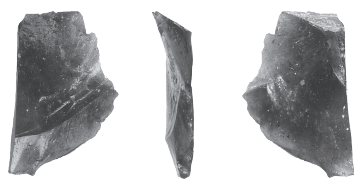
鶴ヶ岡遺跡第6地点調査区近景



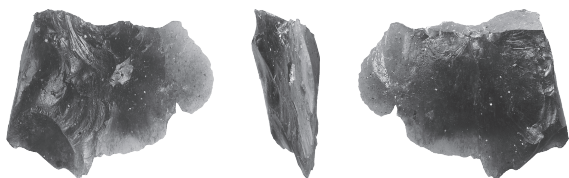
鶴ヶ岡遺跡第6地点出土遺物



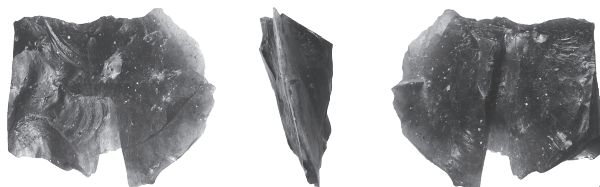
1



2



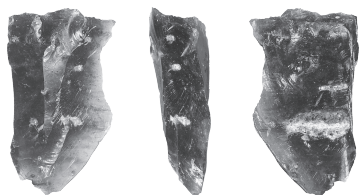
3



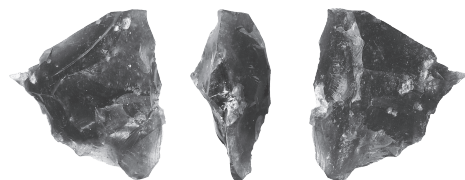
4



5



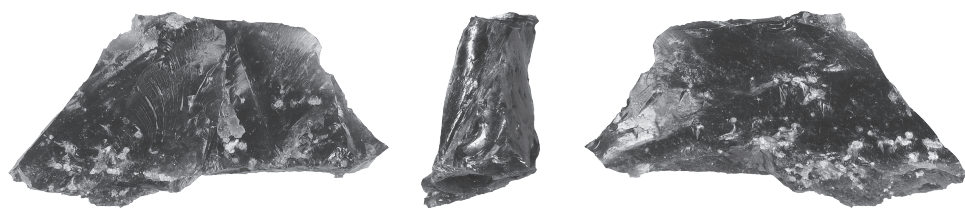
6



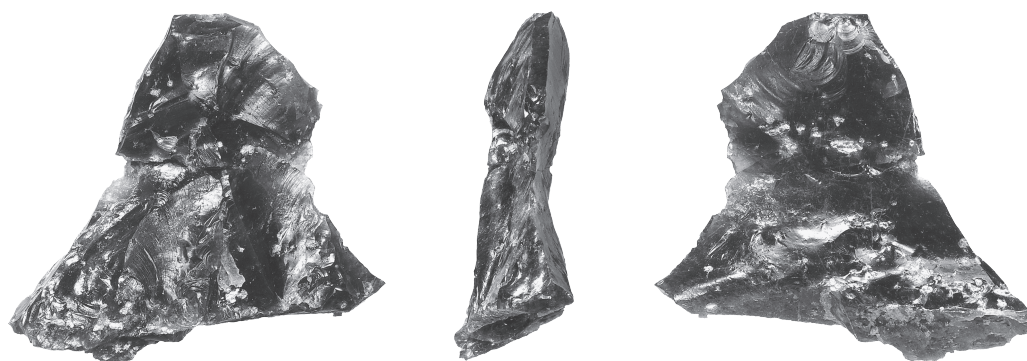
7



8



9



8 + 9